

Whoops!

TAKE
FREE。

2018 WINTER Vol.18



多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ発行

特集 「古民家」 ギャラリー

飯島商店
mintaka
武相荘

2



加藤正樹 / ヴィンテージ書籍、が新たな発想を促す 6

Special Interview 白根ゆたんぽ 8

目黒の地名を生んだ不動尊を訪ねて 10

金子未弥 / 地図はいったい何を沈黙しているのか 11

特集

「古民家」ギャラリー

かつて日本人の一般的な居宅だった「民家」は、時代が経つにつれ「古民家」と呼ばれるようになり、多くは老朽化や土地開発によって姿を消しつつある。しかし修復やリノベーションを経て、新しいなにかを提供する場として蘇った家々がある。それをここでは「古民家ギャラリー」と呼ぶ。横須賀の「飯島商店」、町田の「mintaka」、「武相荘」を訪ね、それぞれの背景にある歴史や人の営みを探った。



山縣俊介 個展「ウチトソト 界隈の祈り」より（飯島商店） 写真提供=飯島商店

歌って踊れる古民家、 「飯島商店」とは？

神奈川県横須賀市の中心地、京急線横須賀中央駅から徒歩3分ほどの立地にその古民家「飯島商店」はある。築85年の歴史を持つ2階建ての木造家屋で開かれている美術家の個展を訪れ、無人の玄関から踏み入れた足で床板を軋ませると、まるで住居に無断で侵入するかのような背徳感を覚えた。



飯島商店の外観。左手側が入り口、右手側は間貸しの田中屋呉服店

地元では古くから牛乳屋やタバコ販売店として現在と同じ名称で知られていた「飯島商店」は、現在デザイナーのタカラマハヤ氏が運営している。ここを一言で紹介するならば「オルタナティブ古民家」。2016年の始動からは、これまで絵画・彫刻・陶器作品などのギャラリースペースとしての展示や、ライブスペースや撮影スタジオ、映画の上映から暗室喫茶、ダンスパーティーの会場など、ジャンルを限定しない自由な活動の場になっている。特に人が入るスペースとして活用されているのは2階だ。襖が外された16畳の広い部屋にはガラスの引き戸や穴の空いた障子に囲まれ、古民家の佇まいを強く残している。ある展示で楽器が置かれていた床の間には、演劇公演の際には音響設備が並んでいた。

昨年11月に開かれていた美術家の山縣俊介氏の個展では、2階のスペースに絵画の大作が展示されていた。白い画面から飛び出してくるような力強い筆跡とまぶしいほど鮮やかな色使いが視覚に訴えかけてくる作品だったが、これが古民家に展示されていることで別の含



飯島商店2階 写真提供=飯島商店

みを持たれる。階段を上り、日中でも薄暗い和室に掛けられた壁一面を覆うほど大きなカンヴァスは、明らかな違和感を生み出している。しかしいわゆるホワイトキューブとは真逆の手法でありながら、その階、むしろその家全体が一つの作品ではないのかと感じさせるほど、場を調和させる空気を作り出していた。

飯島商店は、かねてよりグラフィックデザインの仕事をしていたタカラ氏が制作や撮影のできる大きなスペースを探していた際に、知り合いに紹介されて出会った物件だという。

当初は前の住人が残した物が雑多に置かれていたが、掃除の手伝いなどで何度か訪れるうちに住みたいと感じるようになったという。古民家は使い手が現れなければ建て替えられなくなってしまう可能性がある。移り住もうと思ったのは、古民家の歴史的な魅力にただ惹かれただけではなく、アートの活動の拠点にすれば新しい可能性が生まれることに気づいたからだろうか。あまりリノベーションをせずほぼそのままの姿を残したのも、古民家の存在意義を理解せずに壊したくないという思いがあったかららしい。飯島商店はさまざまな活動を展開できるスペースでありながら、同時にタカラ氏の家でもある。たくさんの方でつながるこの「店」は、今後どのように広がっていくのだろうか。

元駄菓子屋を再利用して美大生が運営する「mintaka」

東京都町田市。JR横浜線相原駅の近くにある「mintaka」は、多摩美術大学と東京造形大学の学生が協力して運営する雑貨屋兼ギャラリーだ。

穏やかな緑色に包まれた古めかしくも味のあるこの雑貨屋は、駄菓子屋という古きよき文化を象徴する店が入っていた古民家を再利用している。2009年4月、某所でオープンした当初は小さな家のような店舗だったが、現在の店舗同様の温かみがあったという。数年後、多摩美術大学にも東京造形大学にも近いということで、下町らしさの残る現在の場所に移転してきた。

入口すぐの棚に陳列されたブローチやノートなどの商品が、近くを通りかかる人の興味を引く。晴れた日には、差し込む光によって魅力が強調される。中に入ると、レトロな内装にマッチしたポストカードなどの商品が店内に彩りを与える。さらに奥に進むと、古めかしいミシンが目を引く小さな白いギャラリースペースがある。

mintakaの商品には、販売を委託されたものとスタッフ自身が制作したものがある。それらは可愛らしくもどこか落ち着いた雰囲気統一されている。委託するのは、主に近所の人々、趣味で作る人、多摩美術大学や東京造形大学の学生と卒業生、Instagramで知った人など。ここが創作物を販売する場であることが知られ、売ってみたいと思う人たちを惹きつけている。彼らが委託を依頼した作品の中で、美大生であるスタッフの審査に通ったものが陳列される。審査のポイントは、オリジナリティがあることと mintaka の雰囲気にもマッチしていることだ。

学生による運営には、一般的な雑貨屋にはない魅力がある。まずは、学生目線の運営。学内でコミュニティを作り、輪を広げることが可能。いい作品を制作する学生作家をスカウトすることもあるという。作品の委託料も安価で制限が少ないため、委託の敷居が低い。一般的なギャラリーは、美術に興味を持ち始めたあたりの人などには入るのをためらうような堅いイメージを抱かせることがある。もともとの駄菓子屋の空気が親しみやすさを増し、購入や委託の敷居も低い mintaka は、古民家を再利用していながらも、かなりのニュータイプなのかもしれない。

mintakaでは、似顔絵教室などのワークショップも開いている。目的は子どもたちに



mintaka の外観。店名は創始者の名前の頭文字とオリオン座の恒星の名前が由来となっている

「描く」楽しさを教えること。中には美術の先生を目指している子どももいるという。そのため、スタッフは準備する絵の具の種類やどの技法を教えるかを考え、相談する。油彩とアクリル絵の具ではタッチが微妙に違うし、色鉛筆での描写には独特の雰囲気がある。美大で学んだ知識や技術を生かして教えられる。子どもたちも未知の技法を試すことで、表情が生き生きしてくる。代表者を務める多摩美



飯島商店オーナーのタカラマハヤ氏。

右に見えるのれんは、芹沢銈介作



飯島商店で上演された秋山ふせんの舞台「はらいそ」より

写真提供=飯島商店

飯島商店

〒238-0007

神奈川県横須賀市若松町 1-12

京急横須賀中央駅東口より徒歩3分



mintaka 店内



mintaka 店内



mintaka 代表の熊坂佳子さん。代表者は毎年2年生で相談して決めるそうだ。現在、各大学から十数名ずつのスタッフが集まっている

mintaka

〒194-0211

東京都町田市相原町 798-6

JR 横浜線相原駅より徒歩 3 分

術大学絵画学科油画専攻の熊坂佳子さんは、「ワークショップの運営では完璧さは求めない。発見や反省点を生かして、次の機会にグレードアップできたらいいのです」と語った。

「大学の課題などもあって大変ですが、スタッフ同士がフォローし合うことで運営が成り立っています。他学科の学生と交流してポスターを作ってもらったり、技術を学んだりすることもある。委託してきた作家からも刺激を受ける。何よりも、美大で学んだことを実際の社会で生かせるのがいいですね。企業ではないのでやりたいことができる。一人ではできないこともみんなでやればできます」

熊坂さんの言葉には、大学生ならではの強みがにじみ出ている。

白洲次郎・正子夫妻が暮らした「無駄のある家」

東京・町田市能ヶ谷の住宅街に、「武相荘（ぶあいそう）」という洒落た名前を持つ古民家がある。実業家で政治にも関わった白洲次郎と随筆家で骨董品収集家でもあった白洲正子夫妻の終の棲家となった建物だ。住宅街の中にありながらも、この一帯だけは木々に囲まれた別世界の様相を呈している。

白洲夫妻が築 150 年の農家を買って住み始めたのは 1943 年、第二次大戦中のことだった。白洲次郎は実業家として東北電力の

会長などを歴任したほか、戦後の日本国憲法の草案作りなどにも関わっていた。そんな人物が古民家に住んだのはなぜか。現在ミュージアムとして公開されている建物に入ると、思いの一端に触れることができる。

引き戸を開けてまず目に入ったのは、西洋式の応接セットだ。ソファの上に、白洲次郎が着ていたスーツが置かれていた。壁には昔ながらの水銀式の大きな温度計。少し歩いて目を捉えたのは、額装された西洋の古楽譜だった。解説板に「ネウマ譜」とある。西洋中世のグレゴリオ聖歌などで使われていた楽譜だ。現代の五線譜に比べてシンプルだが彩色が施されており、鑑賞に値する美しさを持つ。こうした西洋の文物にも、特に違和感を持つことはない。

部屋の片隅に、「石造薬研（やげん）」と記された古墳時代の器があった。古代日本の遺物にもかかわらず、ガラスケースに入っていない置き方が心地よい。当時の彼らの暮らしぶりを体感できるからだ。

囲炉裏のある部屋には、皿や徳利などたくさんある陶磁器が、やはりむき出しの状態で見られていた。室町～江戸時代の日本や 18 世紀英国の角鉢、黒田辰秋の椀などもある。

「彼らが実際に食事のときに使っていた器なんですよ」

こう教えてくれたのは、白洲夫妻の長女桂子さんの夫の牧山圭男さんだ。集めた骨董品を普段使いしていた暮らしがいかに心地いい

ものであったか。いや、自然過ぎてむしろ何も感じていなかったかもしれない。そんなさまざまな想像が頭をかすめる。

武相荘が公開されたのは 2001 年である。町田市の文化財（史跡）の指定も受けた。武相荘は往年の姿のままだったが、周囲はそうではなかったという。「宅地開発が進み、周囲から森や小川が姿を消していた。この家も使われなくなって廃屋化していた。妻の桂子がこれではいけないと考え、蘇らせて公開しようと考えた」と牧山さんは言う。そもそも当時から単なる住宅地だったなら、白洲夫妻がわざわざ移住することもなかっただろう。

ある部屋に「無駄のある家」と題された白洲次郎の文章が掲示されていた。もともとの農家がシンプルな田の字型で改造の余地がいくらでもあり、長い時間をかけて住みよいうに変えられるその無駄がいいというのである。その言葉を象徴するのが、建物の片隅にある小さな書齋だ。座っていると、きっと心地よく仕事ができたと違いない。ここではそんな想像が膨らむ。彼らの生活には実に学ぶべきことが多い。

取材・文・撮影＝青木真梨恵（飯島商店）

板垣万由子（mintaka）

小川敦生（旧白洲邸武相荘）

レイアウト＝板垣万由子



町田市の林の中に立つ「旧白洲邸武相荘」。白洲夫妻が住み始めた当時は鶴川村だった。現在の最寄駅は小田急線鶴川駅。白洲次郎の愛車の同型車を置いたガレージやレストランなども併設されている



古墳時代の石造薬研



牧山圭男さん

旧白洲邸武相荘

〒195-0053
東京都町田市能ヶ谷7-3-2
小田急線鶴川駅より徒歩15分
Tel:042-735-5732



武相荘で展示されていた鎌倉時代の女神像



旧白洲家の書斎。蔵書もそのまま残っている

この人に聞く **“ヴィンテージ書籍、”が新たな発想を促す**

加藤正樹さん（代官山 蔦屋書店ブック・コンシェルジュ）

東京・代官山の代官山蔦屋書店は2011年にオープンし、今年で8年目を迎える。「人々に新しいライフスタイルを提案する」というコンセプトのもと、老若男女さまざまな世代が利用している。同店で「ブック・コンシェルジュ」を務めている加藤正樹さんに話を聞くと、「ヴィンテージ書籍」というキーワードが浮かび上がってきた。



代官山 蔦屋書店（正面）*

2011年、東京・代官山にオープンした代官山蔦屋書店は、新刊とベストセラーを中心に配置する常識的な書店の風景を一変させた。コーナーごとに掘り下げたテーマに沿って収集した書籍を集めた店頭は、趣味人の机や書棚を見ているようでもある。店内にはカフェやラウンジがあり、そこで本を読むこともできる。DVDや音楽CDもある。ところどころにアート作品が配され、書籍と落ち着いて向き合う場の空気を醸成している。客にとっては書籍を買う場である前に、まずは文化の産物としての書籍が生み出した空気の中に身を浸して楽しむ場として存在しているように思える。

この空間のモードにはモデルがあるという。1960～70年代に一世を風靡した「原宿セントラルアパート」である。そこは、写真事務所やブティック、カフェなどが入

り、デザイナーやスタイリストラあらゆる分野のクリエイターが集って語り、クリエイティブな発信をする場となっていた。

その「原宿セントラルアパート」のカフェ「レオン」に出入りしていた劇作家で歌人の寺山修司に「街は、いますぐ劇場になりたがっている。さあ、台本を捨てよ、街へ出よう」(原文通り-寺山修司著『寺山修司演劇論集』1984年国文社刊より引用)という名言がある。1983年に蔦屋書店(現TSUTAYA)を創業した増田宗昭さんはその言葉に力を得て、「本は劇場である、お客様(=プレイヤー)はその世界(=空間)の観客であるのだけれども、主役なのです」(増田宗昭著『代官山 オトナ TSUTAYA 計画』復刊ドットコム刊)と劇場型書店をプランニングした。

劇場型とはトークイベントやさまざまなフェアが日々開催される賑やかな空間

だけをいうのではない。「1号館から3号館までつながっているマガジンストリートから各フロアに歩を向ければ、市川団十郎に北斎、シャネルにバスキア、イサム・ノグチに田中一光、三島由紀夫にオーダリー・ハップバーン、西郷隆盛にステイブ・ジョブスといった本と次々に出会うことになる。今はこの世にいない世界中の人たちの著書や彼らについての書籍がそこにある。まさに本は劇場ではないか。プレイヤー(お客様)は本たちと時に戯れ時に刺激を受け人生を歩んでいく。そしてそうしたプレイヤーたちすらもまたここでは「風景」となって見られる、そんな劇場なのだ」。

さらに加藤さんの感覚によれば、人文やビジネス、アートやデザイン、旅行や料理、映画や音楽といったジャンルも実は誰もの脳の中でつながっている。だから「思



店内のラウンジ「Anjin」に展示されているウジェーヌ・アジェの写真集（上）と店内の様子（下2点） 写真提供=代官山 蔦屋書店



加藤正樹(かとう・まさき) 代官山 蔦屋書店ブック・コンシェルジュ、おもにヴィンテージ写真集・アートブックを担当。青山学院大学英米文学科卒業。編集工学研究所編集担当を務め、1990年、写真集や美術洋書のリース専門店『Art Bird Books』を開業。1992年、中目黒駅前に主に古書・絶版写真集、アートブックやファッションブックを販売する店舗を構える。2009年、道路拡張工事のため閉店。



いもよらないかたちでアイデアが生まれてくる。それは仕事の時にも、休暇の時にもおこる。〈ライフ〉と〈ワーク〉が融け込み、感覚が絶えず揺さぶられ新たな回路とバランスが生まれる場所」という。「書籍は、本(もと)という字で表しますね」と加藤さんは語る。さらに、「もともとは木の根の太い部分に印をつけたものの意味ですが、物事の大本の意味なわけです。新しく刊行された書籍でも、過去の本や資料など大本(おおもと)が参照されたりしています。ファッションのトレンドでも、何十年も前のアヴァンギャルドなスタイルを本(もと)に変換され斬新さが加えられます。そこにヴィンテージ書籍の重要性があります」と続けた。

ヴィンテージとは、その時代、その環境の、アーティストや著者、デザイナーや造本家の感性や考え、そしてイメージネーショ

ンの結晶だ。「写真家の森山大道も『過去はいつも新しく、未来はつねに懐かしい』という言葉が著書のタイトル(2000年刊行 森山大道著『過去はいつも新しく、未来はつねに懐かしい』)においたように、古いものの中に、タイムカプセルを開けたときのように新たな価値を発見することがある。展覧会もまた新たな過去の発見や視点が生み出された時に催される」と加藤さんは言う。

2号館2階のカフェラウンジ「Anjin」に一世紀前に撮られた写真が展示されている。それは半世紀前に出版されたヴィンテージ写真集(『The World of Atget』4巻本 by MoMA)で、それを21世紀の、たまたま誰かと待ち合わせてお茶をした場所で見ると、こうした書籍や写真との思いがけない出会いを促し、さらには他ジャンルの書籍と触れることで新たな発想や気づきを生み出す

きっかけになることを、代官山蔦屋書店は標榜している。決まった分類のもとで書架に膨大な本が並べられた図書館ではなかなか経験できないことなのではないだろうか。

加藤さんは、以前「ヴィンテージ」の写真集や美術書を扱う専門店を営んでいたそう。代官山蔦屋書店には、加藤さんのようにさまざまな経験を積み、経歴を持った「コンシェルジュ」が多くいるそう。ここに足を運ぶ際には、それぞれの分野で経験豊かな彼らにそっと話しかけてみると、思いがけない本と出会うきっかけになるかもしれない。

取材・文・撮影(＊) = 山田浩子
レイアウト = 板垣万由子

代官山 蔦屋書店

〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町17-5
Tel: 03-3770-2525

Special Interview

白根 ゆたんぼ (イラストレーター) イラストへの思いを語る



CD ジャケット、雑誌の挿絵、電車の車内広告…白根ゆたんぼのイラストを目にする機会が生
活の中に増えた。ポップで明るいきれど、それだけでない引っかかりを心に残してゆく。

スタンダードブックストア心齋橋(大阪市)で昨年11~12月に開かれた作品展示と物販フェアのオープニングイベントを終え、東京へ戻ったばかりの白根が、イラストレーターとして働くこと、そして展示をすることへの思いを語った。クライアントとの打ち合わせの中で意図や希望を確認し、技法や方向性の提案を行いながらイラストレーションの方向性を決めていくという。

雑誌の仕事では、『BRUTUS』2017年7月15日号(特集「建築を楽しむ教科書」)が記憶に新しい。建築というテーマを扱うにあたり、クライアントとの打ち合わせの中で、「建築の似顔絵」というキーワードが浮かび上がってきた。表紙は雑誌の入り口である。白根は建築のイラストレーションを、iPadを用いて描いた。イラストを「上手く描きすぎない」ことにしたのだそう。基本的に職業としてのイラストレーターは、どのようなモチーフでも同じテイストで描くスキルが求められる。白根はそれを踏まえた上で、このようにクライアントの求めに応じて柔軟に描画技法を使い分けている。白根は、個展などで展示する作品を描く

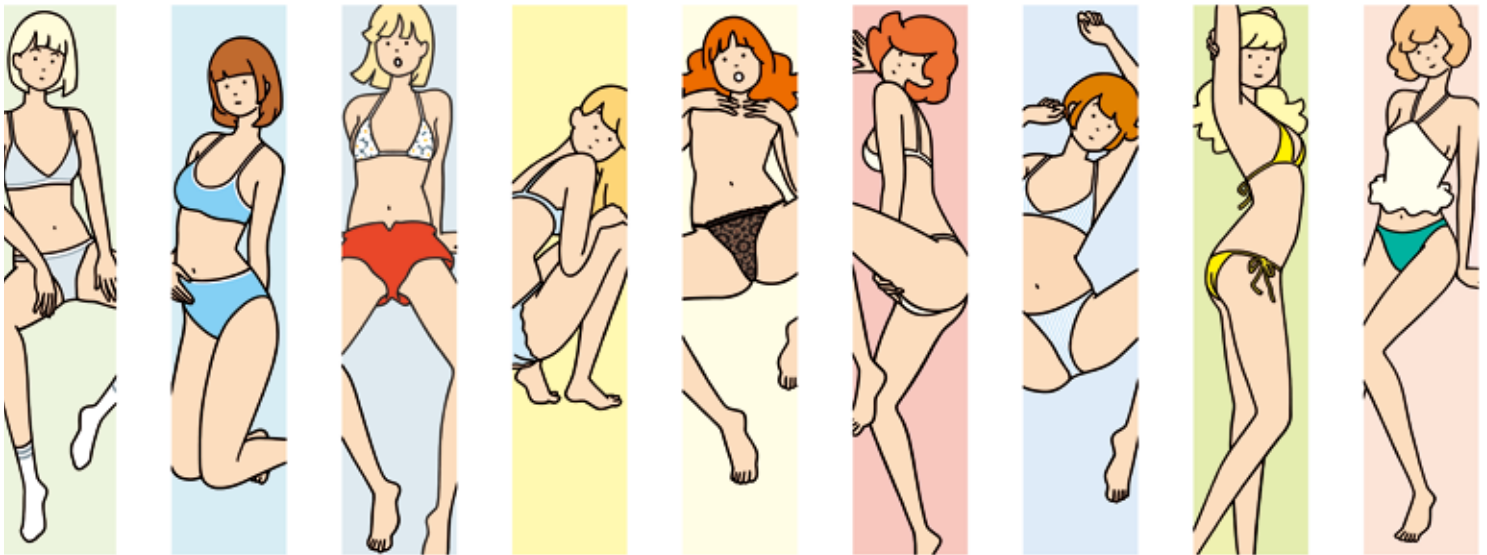
場合は水彩やアクリル絵の具、鉛筆でのドローイングを用いることもあるが、基本的に雑誌などの印刷媒体やWebメディア用のイラストを描く際はデジタル技術を利用する。まず、コピー用紙にシャープペンシルで描いた下書きを筆ペン風のマーカーなどで清書。それをスキャンしてデジタルデータ化し、Photoshopで線を補正したり、全体のバランスを整えたりしながら微調整を加えるという。

下書きをアナログで行うのは、そのスピード感と、紙にシャープペンシルで絵を描くという感覚を白根が好むからである。そして、白根はデジタルでイラストを描く若い人が空間や構図をつかむことに苦戦しているときも、まず紙に下絵を描いてみることを勧めることがある。モニター内で拡大と縮小をしながら絵を描こうとすると、絵全体のバランスを見失いやすくなり、描画時間が余分にかかってしまう。作業時間を短くする、という意味でも紙に描いてみる。画面全体を把握しつつ絵の構成やデッサンをすすめられるのがよいのだろう。

白根のアイコンともいえるポップでセクシー

な女の子たちを描くきっかけは、いろいろなところにある。街を歩く女の子の髪型、グリア写真に載る女性の腰のひねりの角度、足の組み方、Tumblrで流れてきた写真など、絵を描くきっかけとなるものはとても多いという。または、そうしたイメージなしでゼロから描くこともある。あくまでファンタジーとして、白根は自身の描く女の子を「あくまでファンタジーとして、なんでも言うことをきいてくれる都合のよい女の子」と呼ぶそう。ファンタジーだからこそ、白根のイラストは、軽やかさを失わないままに「なぜこの女の子は実在しないのだろう?」と疑問を持つほどの生命力や親しみを感じさせるのだろう。

最後に、白根に「イラストレーターを目指す人にひとこといただけませんか」と聞くと、「具体的な目標や憧れを持つことが大事」と語った。白根自身、イラストレーターとしての本格的な仕事を始めて5~6年目頃、スキップカウズというバンドを知り「あのバンドのジャケットは自分だったらもっと面白くできるのに」と知人に発言したのがきっかけで、本当にジャケットイラストの仕事が決まったという



色使い、女の子のポーズ、縦長の紙の画角の中での切り取り方を工夫し、ボリューム感、構図、空間を感じさせる作品。企画展『Sexy Harajuku』より



これまでに白根が製作していたZINE、ステッカー。展示のアーカイブとして、遠方の人や展示に来ることができなかった人も楽しめるようにという意図もあり制作している。2011年にEnlightenmentを率いるヒロ杉山氏に誘いを受け『Here is ZINE』というイベント出展用にZINEを制作したことがきっかけ。両方ともオンラインストアや展示で購入することが可能

一例がある。そして、今年20周年を迎えたスキップカウズのCDも再び白根がジャケットイラストを担当した。目標は、「あの雑誌の表紙のイラストを描く」「好きなミュージシャンのCDジャケットを描く」など小さな目標から大きな目標までなんでもいい。

白根は、自身のスタイルを作りすぎないことにしている。自分で作り出した個性やスタイルは、自覚できる範囲で作出したものにすぎない。「個性」や「評価」はあくまで相対的なものなので、仕事をする中でクライアントから「何を求められているか」に気づく力も必要だという。また同時に「コンセプトやテーマを頭で考えるよりも実際に手を動かすことが大事」とも。白根自身も、展示用の作品を描くとき、クライアントからの依頼、それぞれ実作業の過程や完成した作品から分かるものは多いという。作品の表面から立ち上がるものを大事にしているからこそ、白根のイラストの軽やかでポップな魅力に我々が惹きつけられてしまう秘密なのだろう。

取材・文・レイアウト＝野田美紗子
撮影＝小川哲汰朗



白根の描く水彩画の女の子。アナログの線はより柔らかさが目立ち、実際の女の子の体の線に近い印象を受ける

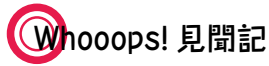


BRITUS表紙のイラスト。下絵を鉛筆で描き、iPadで撮影してデータとして取り込み、ドローイングアプリを使ってApple Pencilで線を描いていた。パソコンにデータを移し、Photoshopで入稿用にデータを調整してイラストが完成する



白根ゆたんぼ (しらね・ゆたんぼ)

イラストレーター。1968年埼玉生まれ。広告、雑誌、音楽メディア、ウェブコンテンツなどにイラストを提供。個展の開催や企画展の参加も多い。自身によるZINEやグッズの制作なども行っている。最近の仕事に、バスクリン「きき湯」CMイラストレーション、グリコ「カンパイシェアハピFes.」アバターパーツ製作など。東京在住。



目黒の地名を生んだ不動尊を訪ねて

「目黒不動尊」の通称で知られる東京・目黒の瀧泉寺を訪れた。池の畔の石像、竜の口から湧き出る水、秘仏とつながれた木の柱…。境内で、想像を揺さぶられるさまざまなものに出会った。目黒の地名もこの寺に由来するという。歩きつつ歴史に思いを馳せると、江戸の人々の賑わいが見えてきた。



独鈷の瀧のある水場の前に祀られていた「水かけ不動」

瀧泉寺大本堂正面。手前には諸願成就を行う縁結びの柱が立つ



大階段頂上から左右に伸びた道の先にある護衛不動尊と意志不動尊

目黒不動尊 泰叡山瀧泉寺
〒153-0064 東京都目黒区
下目黒3-20-26



瀧泉寺を訪れたのは、昨年11月。最寄りの東急目黒線不動前駅から12分ほど歩き、商店街を少し過ぎたところに立つ仁王門をくぐると、小さな水場の畔に佇む不動明王の石像が目飛び込んできた。この像は「水かけ不動」と呼ばれ、水をかけた部位の病気が怪我が治るといわれている。ただしこの像ができたのは1996年。「目黒不動尊」という寺の通称はもっと古くからある。ほかにも不動明王像があると想像される。

池の向こう側の岩壁には青銅で鑄造された竜型の口があり、水が流れ出ている。寺の名前に「滝」の旧字が当てられていることと何か関係があるのだろうか。伝承によると、平安時代初期の808年、天台宗の僧侶、慈覚大師円仁が夢で見た不動明王を祀る堂を建立したのが寺院創建の由来。その敷地を定めるにあたって独鈷(とっこ)と呼ばれる尖った仏具を投げると泉のように水が湧き出したことから、ここは「独鈷の瀧」と呼ばれているという。まさに「泉」と「瀧」の字で成り立つ寺名

と符合する話であることに一人納得した。

「男坂」と呼ばれる大階段を登ると、朱色が鮮やかな大本堂が威厳のある姿を見せた。大本堂の前で、ぼつりと立っている木の柱が目引いた。近づいてよく見ると、目黒不動尊の12年に一度の酉年の御開扉(ごかいひ)において諸願成就をする旨が書かれていた。瀧泉寺によると、この木の柱は御開扉の折に立てられ、大本堂に祀られている秘仏の不動明王像の右手と白、紫、赤、緑、黄の五色の紐でつながれる。不動明王と縁結びをするためのものという。五色は如来の智慧を表すと言われ、密教とも深い関わりを持つ。そして「目黒不動尊」という通称自体も五色に由来するという。五色とはもともと黒、白、赤、青、黄だった。江戸時代に江戸城を守護する五色の名を持つ不動明王が選定された(異説もある)。「目黒」や「目白」の地名もここからきているようだ。

瀧泉寺によると、「江戸の五色不動はもともとこの目黒不動尊から着想を得たものだった」という。この地に不動尊が存在したから

こそ、五色不動を周囲に配置して江戸城を守ろうという発想が生まれたというわけだ。また、渡辺照宏著『不動明王』を読むと、五色不動そのものの起源はインド仏教にあるという。瀧泉寺は密教伝来の後まもなく開基されたものの火災などにより荒廃し、江戸時代になって徳川家光が大伽藍を再興したと伝えられている。再興にあたって五色の思想が生かされ、「お不動様に守られる江戸」ができたことに思い馳せるのもまた楽しく感じる。そして、人々がありがたくお参りをする賑わいは、現在まで続いているのである。

境内を歩いて、本堂の秘仏をはじめ意志不動尊、護衛不動尊、腰立不動など少なくとも8体の不動明王の仏像が祀られていることにも驚いた。大日如来の化身の一つという不動明王は怖い顔をしているが、実は人々を守るありがたい存在であり、だからこそ人々に親しまれているのだろう。

取材・文・写真・レイアウト=椋田大揮

zoom up 地図はいったい何を沈黙しているのか

金子未弥さん（アーティスト）

Tokyo Midtown Award 2017 アートコンペで金子未弥さんの《地図の沈黙を翻訳せよ》がグランプリを受賞した。アルミ板に都市の名前を無数に刻印した作品だ。地図はいったい何を沈黙しているのだろうか。金子さんに聞いた。



©Motohiko David Suzuki



Tokyo Midtown Award 2017 アートコンペ グランプリ受賞作品《地図の翻訳を翻訳せよ》展示風景

Tokyo Midtown Award 2017(主催:東京ミッドタウン)のアートコンペ部門でグランプリを受賞した金子未弥さんの《地図の沈黙を翻訳せよ》は、昨年8月、横浜市・黄金町のスタジオで公開制作された作品だ。黒いアルマイト処理をしたアルミ板に多くの都市の名前が英字で刻印されている。タイトルには次のような意味が込められているという。

「地図に書かれている都市名は沈黙している。そこに潜んでいる記憶を読み解き、翻訳することで、「都市」について考えてみたい。都市の名は、文字が読めなくなるほどぎっしり刻む。いくつもの名前が重なると、それぞれの都市に存在する記憶が混ざり合い、その全貌は見難くなる」

この作品に刻まれている都市名はたしていくつあるのか、数えるのは不可能と思えるほど多い。ところが、それぞれの地名に「思いが込められている」という。

「私に地図をください。」——金子さんが公開制作をした黄金町アーティスト・イン・レジデンスプログラムに参加した折に、こうして地図を募ったそうだ。以前は自分で集めた地図を素材にしていたが、初めて自分以外の人にその選択を委ねた。すると持ってくる人は、地図とともに思い思いの地図に載っている都市にまつわるストーリーが集まり始める。海外の地図を持って来る人も多く、行ってみたい場所、思い出の場所、出身地、地元など、都市に思いを抱く理由はさまざまだった。

多摩美術大学博士前期課程在籍中には、最初は作成年代の異なる同じ都市の地図をレイヤー状にして上下に何層にも重ね、都市の中心を浮かび上がらせながら時間の推移を内包した立体作品を制作していた。いわば、都市を客観的に捉える作品だった。しかしある時、「自分自身が身を置いている場所こそが都市である」ことに目を向ける。さ

らに、中にいるがゆえに見えるさまざまな“思い”こそが都市の大切な構成要素なのではないか。工芸を専攻していた金子さんは、「刻印」という行為に表現の行く先を見出すのである。

「都市はすべて人が作った物で構成されていて、それぞれの物に対する記憶がある。刻印することでそうした記憶の痕跡を刻みたい」と話す。横浜市の黄金町という小さなエリアで集めた地図、そして収集した人々の思いは実に多様だった。何も問いかねなければ地図は「沈黙」したままである。

アルミ板を相手に、工具でかかんと音を立てながらひたすら「刻印」という。地図の深奥にうごめいているものを引き出すそんな作業は、修行のようでもある。アーティストの驚異的な一面に思いを馳せた。

取材・文・レイアウト＝松澤遼



金子未弥 (かねこ・みや) 1989年神奈川県生まれ。2017多摩美術大学大学院美術研究科博士後期課程終了博士号(芸術)取得。2017~横浜・黄金町レジデンス・アーティスト。Tokyo Midtown Award 2017 アートコンペグランプリ。都市名から人々が抱く記憶やイメージを用いて、「都市の肖像」を求める作品展開を行っている。近年の展示に、2016年個展「金子未弥展—都市の肖像を求めて—」(KOMAGOME1-14cas/東京) 2016年「JIGUM Exhibition」(ArtDistrict-p, Busan/韓国) 他多数。 <https://miyaportfolio.wordpress.com/>

Whoops! [ウープス] 2018 WINTER Vol.18

発行日＝2018年01月07日

編集長・デザイン監修＝小川敦生(多摩美術大学芸術学科教授)

編集・誌面デザイン＝笛木一平、松澤遼、椋田大輝、山田浩子、板垣万由子、佐藤隆之、

青木真梨恵、新西洸之介、野田美紗子

表紙レイアウト＝板垣万由子

表紙写真＝旧白洲邸武相荘(→P.4)

発行＝多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ

〒192-0394 東京都八王子市鎌水2-1723

印刷＝多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ

問い合わせ先＝aogawageige77@yahoo.co.jp

Twitter @aogawageige77

Webmagazine「タマガ」＝QRコード

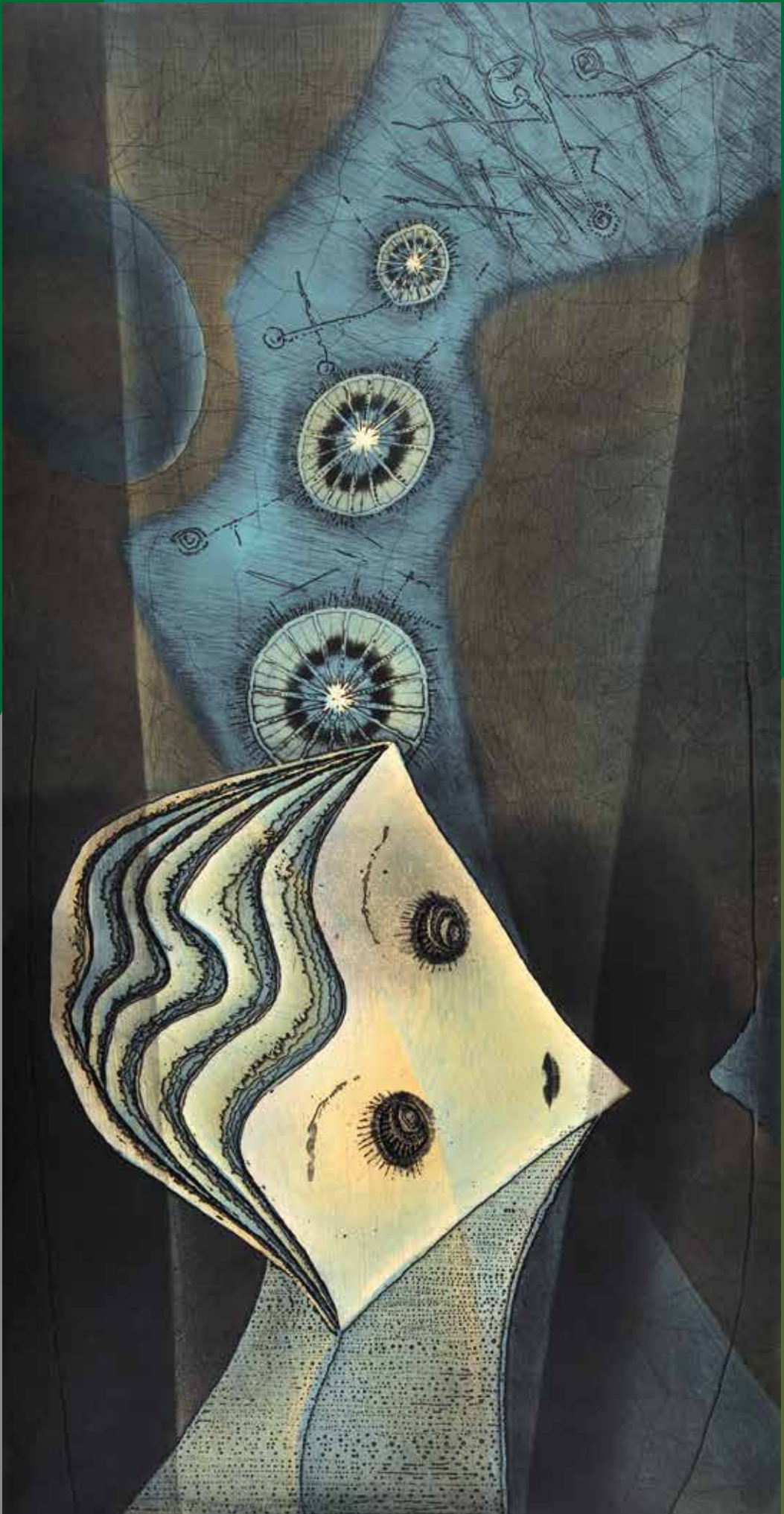
●掲載記事、写真の無断転載を禁じます。



多摩美術大学美術館コレクション展

追悼 深沢幸雄

— 銅版画とガラス絵 —



深沢幸雄「青い衝動」2004年 アクアチント、エッチング、メゾチント、ディープ・エッチング

2017年12月10日(日) ↓ 2018年2月25日(日) 休館日 火曜日・12月26日(火) ~ 1月5日(金)

多摩美術大学美術館

《同時開催》写真コレクション—初期写真から作品表現まで— 奈良原一高、川田喜久治、井手傳次郎など